【動物園大学―野生動物学のすすめ―振り返り】

〇開催日時：平成２６年２月２３日（日）9:00～12:00
〇参加者：京都市立高野中学校　生徒８名，引率２名
　田中　健太(2 年)，塚田　究（2 年），加藤　輝（1 年），東　洸樹（1 年），伊澤　黎（2 年），
　今井　惠仁（2 年），加藤　純（2 年），笹原　直哉（2 年），
　松本　鉄平（引率教諭），入佐　俊興（引率教諭），
〇講師：　京都市動物園　生き物・学び・研究センター　和田晴太郎
〇活動内容
　動物園として中学生に学んでほしい素材を活用した講座を開催してきた。これまで開催してきた講座の実施内容を振り返り，参加者がどのような学習を進められたのか，実際のニーズとのマッチングが出来たのかを議論する。また，標本作成に取組んだ経験を生かし，動物園が現在展開しようとしている統廃合によって廃校となった空き教室を使用した所蔵標本類の活用・展示方法について意見交換するとともに，新たに活用を検討している動物園の素材についても検討を行う。
（１）透明骨格標本の仕上げ
（２）講座の振り返り及び議論
（３）標本類の活用・展示について
（４）新たな講座素材の検討

【実習の様子】

透明骨格標本の仕上げ

グリセリンの交換

封入前の標本

規格瓶への封入作業

企画アンケート

園内移動

元白川小学校への移動（標本とともに）

骨格のつながりについて復習

過去の飼育動物の標本類の観察を通した動物の形態的特徴や多様性への気付き

【所感】

透明骨格標本の封入作業（ガラス瓶にグリセリンと防腐剤を入れ，空気が入らないように密閉する）は難しかったようで，はじめは上手く出来なかったが，何度か失敗を繰り返すことで上達していった。出来上がりには，当然差があり，納得のいかない参加者もいたが，こうした経験が次へのモチベーションにつながるようにしたいと感じた。

また，動物園が所蔵する標本類（骨格，剥製等）への関心は高く，中学２年の学習「人と動物の体のつくりと運動」で目の位置や歯の形などを学んでいることもあり，標本の持つ特徴をとらえながら，動物種を考えるなど，種による違いについて再認識していた。こうした本物の持つ迫力や伝える力を活かした利用を今後も増やしていければと考えている。

今回の動物園大学～野生動物学のすすめ～の講座を振り返りながら，動物園のもつ学習素材を中学生の学習にマッチングさせることは出来たのではないかと感じている。しかし，さらに改善を加えることでより良いプログラムになると考えている。たとえば，ゾウの糞で作った肥料を使ったグリーンウォール作りでは，環境というキーワードで行ったが，ゴーヤやパッションフルーツの実を動物の餌として活用することが出来ており，動物に与えることで，また糞となり，循環していることを体感させることが可能であった。

また，新たな素材としては，園内の池（琵琶湖疏水系）を活用した生物調査を行い，その結果を

発表するというプランを提案したところ興味を示しており，来年度のプログラムとして実施出来ればと考えている。また，今回は野生鳥獣救護センターに保護され，死亡した動物の解剖実習を行ったが，獣害という視点及び人と野生動物の共生という視点から，園内の柿を使ったプログラム（野生動物を引き寄せない工夫として柿をもぎ，つるし柿を作る）についての提案を行ったが，市内の中学生ということもあり，そうした状況は理解されていないようであった。そのため，学んだことを発表することで理解を広げていくことが可能なプログラムとなる。

動物園としても，このような形式での事業実施は初めてであったため，手探りで進めてきたが，今回のノウハウを生かして，さらに展開していきたい。

生き物・学び・研究センター
研究教育係長　　和田　晴太郎